2021 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	**昭和期日本における民衆の対中感情の検討**
キーワード	① 中国感情、②中国観、③民衆

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏　名	カナヤマ　ヤスユキ 金山　泰志
配付時の所属先・職位等 （令和３年４月１日現在）	同朋大学 文学部 人文学科　専任講師
現在の所属先・職位等 （令和４年７月１日現在）	同朋大学 文学部 人文学科　専任講師
プロフィール	1984 年、神奈川県生。横浜市立大学国際文化学部卒業後、日本大学大学院文学研究科日本史専攻博士後期課程修了。博士（文学）。現在（2022 年）、同朋大学文学部専任講師。専門は日本近現代史。大学院時代から現在まで、「近代日本における中国観（対中国感情）」について研究を行っている。

1. 研究の概要

本研究は、従来の歴史研究（思想史研究・対外観研究）が対象にしてこなかった近代日本民衆の中国観を感情レベルで明らかにすることを課題とする。

本研究の特色は、「民衆の感情」に着目していることである。従来の日本の中国観研究では、現実の対中政策を念頭に置いた、特定の個人・知識人層の中国認識・中国論のみに検討が留まっており、現在の世論調査からわかるような感情レベルの中国観（対中感情）については研究が行われてこなかった。

また本研究は、SNS などのインターネットメディアにおける感情むき出しの中国に対するヘイトスピーチの問題を歴史的に問い直すことが可能であり、日中間における相互理解にも少なからず寄与するものである。

2. 研究の動機、目的

日本近代史研究の核心とも言うべき課題は、日本の近代という時代が第二次世界大戦の終結で幕を閉じるように、「戦前の日本がいかにして戦争（日中戦争・太平洋戦争）に至ったのか」という点にある。どうしてあのような戦争の惨禍が起こったのか。その要因を問い直し続ける必要があり、それこそが歴史学が担う大きな役割である。

なぜ、戦争が起こったのか、その要因は多岐にわたるが、一つに戦前の日本社会で共有されていた「民衆の対外感情」の影響が指摘できる。

人は自らの「感情」を利用して行動を選択する。歴史はその行動の結果の積み重ねである。感情の持つ力、単純でわかりやすいものこそ、民衆の多くの支持を得、それが時代のうねりとなる大きな潮流を生み出すことを、コロナ禍の現在、我々は身をもって実感している。

昭和期の戦争に至る道程を考えてみても、感情むき出しの表現が社会に蔓延し、時代を動かしていたことは忘れてはならない。戦前日本の戦争は、当時の日本国民の総意として賛同されていたものであった。そして、その理解の根幹をなしていたのが、当時の日本社会で漠然と共有されていた民衆の対外感情なのである。例えば、日中戦争であれば、日本民衆の中国への否

定的な感情が、太平洋戦争であれば、日本民衆のアメリカへの否定的感情が、日本の戦争への歩みを下から支持していたと考えられる。戦前日本の対外感情を問い直すことは、将来の対外関係を考える上で重要な作業となるだろう。

現在の対中感情（中国に対する感情）については、「外交に関する世論調査」（内閣府）や「日中共同世論調査」（言論ＮＰＯ）から「好き・嫌い」「親しみがある・ない」といった感情レベルの対外観を数値として簡単に把握することができ、現代日本人の対中感情が概ね否定的であることは周知の如くである。では、なぜ現在のような対中感情が形成されるに至ったのか。現在の日中関係に大きな禍根を残した近代以降の変遷を追い、歴史的に相対化する作業が必要となるが、戦前日本の対中感情については、その実証的検討が行われていない（世論調査もない）。戦前の人々の感情に着目することは、現在の対外感情を考える上でも重要な意義を持つ（例えば、ヘイトスピーチの問題一つをとっても）。

従来の日本の対外観研究（日本思想史研究）を見てみると、特定の個人・知識人層の対外論や対外認識（実際の対外政策が念頭に置かれている）に関する研究は豊富な蓄積があるが、民衆の感情レベルの対外観（民衆の対外感情）に関する専論は存在しない。思想史研究では、一部の著名な知識人の言説が当時の社会全般を代表していると暗黙のうちに前提とされていることが多く、中国観研究も例外ではない。つまり、日本民衆の対中感情については、実証的な検討が行われていないのである。

以上のような問題意識から、本研究では「昭和期日本における民衆の対中感情」の実証的把握を試みた。研究課題では、「昭和期」と限定したが、昭和期に至るまでの時間的変化を明らかにするため、実際の検討に際しては明治・大正期の検討も行っている（正確には「近代日本民衆の対中感情の研究」となる）。

具体的には、日本人の対中感情を捉える上で従来看過されてきた「中国料理」「中国服」「麻雀」に着目し、上記三点に付随した中国・中国人評価を検討した。これらは、近代日本で流行した中国とゆかりのある「衣食」と「娯楽」である。当時流行したものに着目することは、民衆感情を捉える上で必須である。

従来の中国観研究において、中国料理や中国服、麻雀に着目した研究はない。思想史研究や対外観研究では、現実の対中政策や対中行動に焦点が当てられるため、近代日本における上記三点の受容については問題関心の外に追いやられてしまっている。

中国料理や中国服、麻雀に対する日本人の評価・感情も、中国観（中国認識）の一端であり、上記三点を語るということは、その発祥元（起源）となる中国・中国人あるいは中国文化についても触れざるを得ず、中国に対して何らかの評価が与えられることになる。近代日本における上記三点の受容と、当時の対中感情は相互に共鳴し合う関係にあると考えられる。

検討に際しては、特定のメディアに限ることなく、中国料理・中国服・麻雀について言及された近代史料を網羅的に扱った（書籍・雑誌・新聞など）。

3. 研究の結果

本研究では、（１）「近代日本の中国料理受容と対中感情」、（２）「近代日本の麻雀受容と対中感情」、（３）「近代日本の中国服受容と対中感情」の検討を行ってきた。

（１）に関しては、明治・大正・昭和戦前期と時代を分け、日本人の中国料理評価とそれに付随して語られる中国・中国人に対する感情を、当該期の日中関係を念頭に置きつつ明らかにした。研究成果を論文としてまとめ、学術誌に掲載予定である（詳しくは、拙稿「近代日本の中国料理受容と対中感情」『日本史研究』719号、2022年7月掲載予定を参照）。

（２）に関しては、麻雀の受容に関する史料が、大正末期以降（1920年代以降）に見えるため、時代を「1920年代」「1930～40年代」と分け、日本人の麻雀評価とそれに付随して語られる中国・中国人評価（対中感情）を明らかにした。こちらも論文として成果を報告した（詳しくは、拙稿「近代日本の麻雀受容と日本人の対中国感情」『風俗史学』74号、2022年3月を参照）。

（３）に関しても、上記と同様に、日本人の中国服評価（主に大正・昭和期）とそれに付随して語られる中国・中国人評価（対中感情）を明らかにする。今後、研究成果を論文としてまとめる予定である。

4. 研究者としてのこれからの展望

今回の「2021 年度若手研究者奨励金」によって、「大正・昭和期」に焦点を当てた自身の研究が一気に進展した。明治期については、研究書を出版しているので（拙著『明治期日本における民衆の中国観』芙蓉書房、2014 年)、その続編（大正・昭和編）に位置づけられるものを出版し、「近代日本における民衆の対中感情の研究」を総体的に取りまとめたい。

その後も、本研究課題のような他国・他者認識研究は引き続き行っていきたい。展望としては、これまでの研究を踏まえつつ、日本の対アジア感情を、より広い視野から明らかにすることである（すでに、日本人の対朝鮮感情や対フィリピン感情などの研究を開始している)。

5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

今回、本研究を遂行するにあたり研究奨励金をご支援いただきました日本私立学校振興・共済事業団及び支援者の皆様に心より感謝申し上げます。本奨励金で行った研究は、これまで自身が行ってきた研究とは、異なる角度からアプローチした研究であり、対外観研究に新しい視角を打ち出すことができたと考えております。

また、本研究課題は、今後の国際情勢を考える上でも、社会に大きく寄与するものであると考えます。現在の国際情勢を鑑みても、日本と中国という隣接する二つの大国の関係性は、日中両国それぞれの平和と繁栄の維持という点だけでなく、アジアさらには国際社会全体の平和と繁栄にも大きく作用します。ここで、重要となるのが、日中間の相互理解の問題です。私の専門分野である日本史からこの点に貢献できることがあるとすれば、日本側の中国理解に関する研究＝「日本の対中感情研究」の提示であり、日中関係を主に日本側の視点から問い直すことになります。今後も、将来の日中関係を考える上で参考となるような研究を続けてまいりたいと思います。